

2014年7月

生誕130年 竹久夢二展

ベル・エポックを生きた夢二とロートレック

2014年9月26日(金)～10月6日(月) 日本橋高島屋8階ホール

主催: 夢二郷土美術館、朝日新聞社 監修: 岡部昌幸(帝京大学教授)

入場料: 一般 800 円、大学・高校生 600 円、中学生以下無料

入場時間: 午前 10 時～午後 7 時 30 分(8 時閉場)、最終日は午後 5 時 30 分まで(6 時閉場)

〔巡回情報〕 会期：2014年 8月27日(水)～ 9月 8日(月) 会場：京都高島屋
 会期：2014年 9月11日(木)～ 9月23日(火・祝) 会場：岡山高島屋
 会期：2014年 10月15日(水)～ 10月27日(月) 会場：横浜高島屋

高島屋では、2014年9月26日(金)～10月6日(月)まで、日本橋高島屋8階ホールにて、「生誕130年 竹久夢二展 ベル・エポックを生きた夢二とロートレック」を開催いたします。大正ロマンを代表する詩人画家・竹久夢二の生誕130周年を記念し、夢二郷土美術館のコレクションを中心に、新たな視点から選んだ作品や資料約200点でその芸術と生涯を振り返ります。

「夢二式美人」といわれる独特の情感をたたえた美人画のスタイルを確立し、人気作家となった夢二は、雑誌の表紙や広告から、千代紙、便箋、封筒、うちわ、半襟、浴衣など日用品まで幅広くデザインを手がけ、商業美術や出版界でも卓越した存在でした。そんな夢二の姿は、19世紀末のパリで活躍したベル・エポック(良き時代)を象徴する画家、トゥールーズ＝ロートレックに重なります。ともに画壇に属さず、版画やポスターを独立したジャンルにまで高めた2人は、時代の先端を読み取る感性を持っていました。

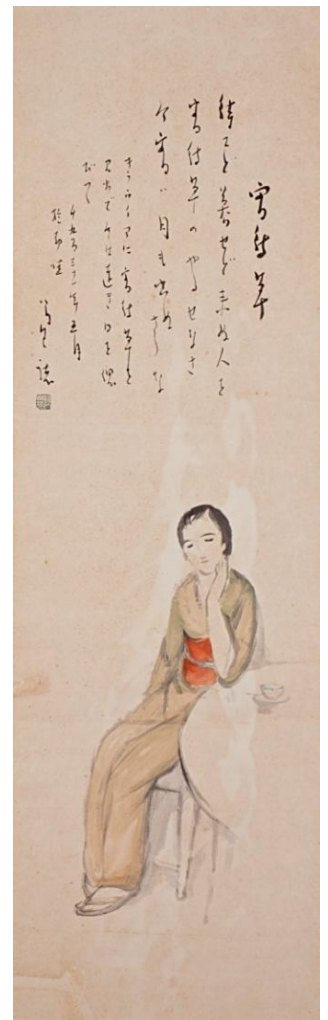
本展では、夢二とロートレック、また東西のベル・エポックに共通するロマンチズムに着目し、その対比を通して、竹久夢二という作家を見つめ直します。



竹久夢二「早春」
大正後期 夢二郷土美術館



アンリ・ド・トゥールーズ＝ロートレック
「ディヴァン・ジャポネ」1892-93年
サントリーポスターコレクション
(大阪新美術館建設準備室寄託)



竹久夢二「宵待草」1931(昭和6)年
ハワイ・ジャパニーズ・センター
※2014年4月新発見が発表された夢二がハワイ滞在中に描いた日本画。ハワイで制作された作品が確認されたのは初めて。

【報道関係者のお問い合わせ先】(掲載不可)

株式会社 高島屋 広報・IR室 中村・桑原・三尾(ミオ) TEL:03-3246-5534

広報代行:株式会社ブレインズ・カンパニー 担当:杉本・村山

TEL: 03-3568-3844 FAX: 03-3568-3838 E-mail: sugimoto@pjbc.co.jp

■展示構成

第1章 夢二の足跡 —美術史のなかで、人びとの間で

大正ロマンを代表する人気作家というイメージの影で、美術史においては必ずしも正当に評価されてこなかった夢二。影響を受けた巨匠や親交の深かった画家たち、また愛した女性たちとのかかわりをたどりながら、その芸術を見つめ直します。

<内容>

- ・若き日、夢見た巨匠たち
- ・夢二式美人の誕生と変遷
- ・前衛画家たちとの交友
- ・旅と郷愁、現代の文人画家

第2章 夢二とベル・エポック —ロートレックとパリの画家たち

夢二がスクラップ帳に残した浮世絵や洋雑誌の切り抜きを手がかりに、東西の「ベル・エポック」を象徴する夢二とロートレックの作品を対比させ、共通する美意識やテーマを日本美術・文化の影響(ジャポニズム)の視点で読み解いていきます。

<内容>

- ・夢二のスクラップ帳
- ・世紀末の美意識 — 西洋と日本との出会い
- ・酒場、歌と踊り
- ・商業美術の興隆

第3章 夢二のロマン

—江戸情緒と近代文学

大正3年、日本橋に開店した「港屋絵草紙店」は江戸情緒あふれる夢二のブランドショップでした。数多く描いた芝居の世界や文学にかかわりの深い作品を中心に、主に大正期の活動に焦点をあてます。

<内容>

- ・港屋絵草紙店
- ・芝居の世界
- ・異国への憧れ
- ・文学と美術の融合



竹久夢二「一カ」1915(大正4)年 夢二郷土美術館

「港屋絵草紙店」の店頭イメージを再現

夢二が企画・デザインした商品を扱うブランドショップであった日本橋区呉服町の「港屋絵草紙店」の店頭イメージを会場内で再現します。港屋は、恩地孝四郎や藤森静雄、東郷青児らが毎日のように出入りし、若い芸術家が作品を発表するギャラリーの役割も担っていたといわれています。

第4章 夢二のモダン —メトロポリスに生きて

大正12年の関東大震災に打撃を受けながらも、復興のなかでわきあがったモダニズム文化の先駆者として東京で活躍した夢二。念願だった洋行を実現し、50年の生涯を閉じるまで、主に昭和期の夢二の姿を紹介します。

<内容>

- ・都市のなかの造形
- ・震災とアール・デコ
- ・デザインの先駆者
- ・洋行 — 1930年代の欧米へ エピローグ 夢二の理想郷

作品に描かれた着物を制作

夢二が到達した理想の女性像といわれる、鮮やかな赤い着物の女性が描かれた「立田姫」をはじめ、本展に出品される「加茂川」、「秋のいこい」の着物と帯を、創業450年の京友禅の老舗「千總」に制作していただきました。作品の中の着物には、夢二の創造が入っています。その夢二の筆致も感じられるような着物と帯が完成しました。こうした着物・帯を、実際に制作する試み自体、世界で初めてのことと言えましょう。

※展示場所は各会場により異なります。



竹久夢二「立田姫」
1931(昭和6)年 夢二郷土美術館

■竹久夢二 プロフィール

- 1884(明治17)年 9月16日、岡山県邑久郡本庄村に生まれる。本名は茂次郎。
- 1899(明治32)年 神戸中学校に入学。12月に中退し、一家で福岡県へ転居。
- 1901(明治34)年 家出して上京、苦学。
- 1902(明治35)年 早稲田実業学校に入学。
- 1905(明治38)年 荒畑寒村のすすめで平民社の『直言』にコマ絵が掲載される。
『中学世界』に「筒井筒」が第一賞入選、初めて夢二の筆名を用いる。
早稲田実業専攻科を中退、投書家時代を終える。
- 1907(明治40)年 1月、岸たまきと結婚。たまきをモデルに「夢二式美人」が生まれる。
- 1908(明治41)年 2月、長男虹之助生まれる。
- 1909(明治42)年 たまきと戸籍上離婚(後に次男不二彦、三男草一をもうける)。
最初の著作『夢二画集 春の巻』発行、ベストセラーとなる。
この後、昭和5年まで約60冊の自著を刊行する。
- 1912(大正1)年 京都府立図書館で「第一回夢二作品展覧会」を開催。
- 1914(大正3)年 10月、日本橋区呉服町に夢二がデザインした商品を売る「港屋」開店。
この頃、笠井彦乃と出会う。
- 1916(大正5)年 11月、京都へ移る。翌年、彦乃も京都へ。
- 1918(大正7)年 京都府立図書館で「竹久夢二抒情画展覧会」を開催。東京に帰る。
- 1919(大正8)年 この年、お葉<佐々木カ子ヨ(かねよ)>をモデルとする。
- 1920(大正9)年 彦乃、死去。
- 1921(大正10)年 お葉と世帯をもつ。
- 1923(大正12)年 「どんたく図案社」結成を発表するが、関東大震災で潰滅。
- 1924(大正13)年 世田谷区松原に自ら設計したアトリエ付住居「少年山荘」完成。
- 1930(昭和5)年 「榛名山美術研究所建設につき」宣言文を発表。
- 1931(昭和6)年 アメリカ・ヨーロッパへ旅立つ(1933=昭和8年帰国)。
- 1934(昭和9)年 9月1日、信州富士見高原療養所で50年の生涯を閉じる。

■アンリ・ド・トゥールーズ=ロートレック プロフィール

- 1864年 11月24日、南フランスのアルビで誕生。由緒ある貴族の家系であった。
- 1878年 13歳のとき、左大腿骨を骨折。翌年には右大腿骨を骨折、両脚の発育が止まる。
- 1882年 モンマルトルにあるレオン・ボナのアトリエに入門。
- 1886年 キャバレー「ミルリトン」に作品が飾られる。この頃から雑誌の挿絵を手がける。
- 1891年 リトグラフを習得。「ムーラン・ルージュ」のためのポスター制作、大評判となる。
- 1892-98年 この間、多くのリトグラフを制作。展覧会への出品や版画集などの出版も。
- 1899年 アルコール中毒の発作で入院。一時パリから離れる。翌年ボルドーに滞在。
- 1901年 パリに戻り、体調悪化。9月9日、母のいるマルロメ城にて36歳で死去。